

CONTENTS

- シリーズ この人に聞く 第20回
2-3 山口悦子さん
コロナ禍 悲劇的な展開を懸念
- topic 1
4 フェアトレード商品を考える

- topic 2 寄稿
5 パキスタンの新型コロナ感染状況
- Bravo No.6
6 緊急時に問われるリーダーシップ

*「活動紹介」と「わたしもボランティア」はお休みします



ネパール・バクマティ県の村で暮らす子どもたち。コロナ禍のなかで、情報が途絶えがちだ (写真提供：山口悦子)



特定非営利活動法人「チョウタリイの会」代表理事

山口 悦子さん

1950年、栃木県日光市生まれ。大学卒業後、1975年から2年間、アメリカ・オハイオ州コロンバスで過ごす。27歳から奈良市在住。大学の非常勤講師などを務めながらネパール、タイ、インドネシア、インドでさまざまな困難を抱えている子どもたちの教育支援と自立支援を行っている。

コロナ禍 悲劇的な展開を懸念 —ネパール 都市封鎖だけでなく、 情報もロックダウン

ネパールにフライトできない。今は、奈良市あやめ池の自宅で現地に送るマスクを手作りしながら、メールなどで情報交換する日々だ。山口悦子さん。途上国での学校建設や医療・福祉支援を続ける特定非営利活動法人「チョウタリイの会」代表理事。コロナ禍を受け、ヒマラヤ入山禁止、首都カトマンズはロックダウン 都市封鎖。そんな閉ざされた国を想い、不安は募る一方だ。

首都から人が消えた

—最初に「チョウタリイ」とは、どういう意味ですか？

ネパール語で「大きな木の下の広い木陰」という意味です。人々が集まり、休息をし、新しい可能性に向かって巣立っていく場所という意味も込められています。1993（平成5）年に、ネパールで、障害のある子どもたちが通う学校を建設することと、女性たちの仕事（就労の機会）づくりを目標として発足しました。

—ネパールでは学校建設が中心です。なぜ、学校建設ですか？

ねらいの一つは、貧困の連鎖を断ち切ること。親の世代が貧しいから、子ども世代も貧しくなる、という悪循環をくい止めるために、教育支援はとても重要です。読み、書き、そろばん（計算）は暮らしの基本。貧困から抜け出すために、なくてはならないもの。教育こそが「生きる力」になります。今は、家族を養うために若者たちは他国へ出稼ぎに行き、危険な労働に就いているのが現状です。毎日約1,500人の若者が出稼ぎに行き、毎日約3人が遺体となって帰ってきます。

—2015年4月、5月に発生したネパール大地震の学校への影響は？

全壊あるいは大きな被害を受けた教室数は3万1,000以上、それ以外の被害を受けた教室は1万6,700以上とされ、100万人以上の子どもたちが学校に通えなくなりました。その後も豪雨などが続き、状況は大きく変わっていません。

—そして、今回のコロナ禍です。

首都カトマンズは、感染者が2人の時点（3月24日）でロックダウンされ、延期を重ねて6月2日まで続く予定です。軍隊が出て「外出許可証」をチェックするなど厳しい規制が敷かれ、生

活必需品店への入店は順番に1人ずつ。2メートル間隔で並んで待っているそうです。カトマンズは盆地で車の排気ガスもひどく、ふだんはスモッグで視界は悪いのですが、今は人通りが途絶え車も消えて、「丘からヒマラヤが見える。こんなことは初めてだ」と、現地から驚きのメールが届きました。

—ゴーストタウンのようになっている？

3月中旬ごろから、出稼ぎの人がどんどん田舎に帰り始めたそうです。インターネットで、「コロナウイルスが迫っている」との情報流れ、連日、バスは満員。天板の上に引越し荷物を満載した車列が、故郷へ大移動したそうです。お金持ちの人は、その前に海外に脱出しました。

—感染者が一桁なのにロックダウン、都会からの脱出……。なぜですか？

政府も、カトマンズで暮らす人々も、医療体制が整っていないので「コロナに感染したら命はない」と危機感を持っていたからです。入院できるのは、お金持ちだけ。それに、感染者数の発表もあてにならない。現時点（5月17日）で292人と発表されていますが、検査機関はカトマンズに一カ所あるだけです。

—学校はどうなっていますか？

建設した学校の多くは、山間部にあります。休校になっていると聞いていますが、現地スタッフも学校に行けず、どのような状況になっているのか、十分には把握できていません。航空機は、国内線・国際線ともストップしていると聞いています。

苦境のなかに差す光

—現地のスタッフのみなさんは、どうしていますか？

チョウタリイネパールという、カトマンズから車で8時間から

13時間かかるジャナクプルという街を拠点にしたNPO法人があります。若いお医者さんを中心にした姉妹団体で、昨年、寄付によって購入できた救急車が走り始めました。3月24日のロックダウンの前に消毒液をつくる活動をスタート。医療崩壊を避けるためにも、「ネパール中の動きにしたい」と活動しています。病院を運営しているメンバーもあり、コロナ患者の受け入れを表明しています。

——カトマンズにもNGOのみなさんがいますね。

私たちと提携しているNGOのラブグリーンネパールです。メンバーは支援先の山奥の学校などへ、手洗いの徹底などをメールで呼びかけました。そして4月中旬からは、村からの要請で食糧を配り始めました。車も止まり、流通がストップしている状態のなかで、貧しい人々に真っ先に影響が出ているそうです。

——山口さんは、マスクを手作りされています。

仲間たちと一緒に500枚を作って現地に送る予定ですが、今は飛行機も飛んでいないし、現地でも郵便などはストップしているので、届けられません。また、医師も看護師も、防護服がないと聞きました。現地で調べていただくと、1着1,000円でできる……。院内感染や医療崩壊を防ぐためにも、防護服が必要です。日本で、募金を呼び掛けている。

——コロナ禍で暗くなる一方でしょうか？

今一番心配しているのは、情報のロックダウンです。とくに山間部の貧困層は、情報から見捨てられた存在になりがちです。怖

さのなかでコロナを受け入れるのではなくて、不確かな情報のなかで受け入れる……。「いつもの、はやり病気でたくさんの人が死んでいる」といった感覚で、危機意識が低い。悲劇的な展開になるのでは、と胸を痛めています。

——今、思われていることを、改めてお聞かせください。

不謹慎だと思われることを覚悟のうえで、あえて言うと「暗いなかでも光を見出さなければ」と思っています。人類も地球も、変わらなければ、生きのびることはできない。それをコロナは突き付けている。ロックダウンなどで二酸化炭素が2割減った、という報道もあり、地球温暖化への警鐘も受け取れます。「目覚めてほしい。普遍的に人間が必要としているものと、そうじゃないものを見極めてほしい」。見えない敵から、そんな命題を与えられていると感じています。

——未来に希望はある？

遠い国の1人や2人を助けてもどうにもならない、と思っていた人も、きっと変わっていく。今、世界中で貧しい人も富める人もみな、同じ苦境に立って、「助け合おう」という声が世界中に響いています。「世界は繋がっていたんだ。個人が幸せであっても、みんな(全体)の幸せにはならない。心がなかったら何も動かない……」。最悪の状況のなかに、光が差し込む日が必ず来る……。私も含めて、多くのみなさんが、そう思っているのではないのでしょうか。もちろん、今は足元の現実を直視しなければなりません。学校建設だけでなく、病院建設なども視野に入れた活動を、と想いを巡らせています。(文・平田篤州)



チョウタリィの会などの支援で開校したブワネソワリ学校の子どもたち（ネパール・デブハミ・バルワ村、写真提供：山口悦子）